

II-375 実践例からみた地域における 環境教育の場に関する研究

大阪大学大学院

八尾 哲史

大阪大学

正会員〇盛岡 通

1. 研究の背景と目的

1.1 環境教育の目的と目標

環境教育の目的は、1970年に制定されたアメリカ合衆国の「環境教育法」や、1975年のベオグラード憲章に明示されており、

「人間と環境との関わりについて理解と認識を深め、責任ある行動がとれるよう人々の学習を推進すること」とまとめられる。

環境教育の目標については、ベオグラード憲章で次の6項目が挙げられている（表1）。

1.2 地域における環境教育の考え方

自然観察は、自然に関する知識を試す作業のレベルを越えていないものが多いが、本質的には、自分の住んでいる土地の自然を自分の心の中に刻み、自分の心がこの自然を大切にしたいと変わっていくことにつながりうる。

身近な地域の自然環境を環境教育のしくみの中に組み込んでいく必要性は、このような自然観察の目的から明きらかとなる。また、アメリカの環境教育法で明記されているように、自然環境だけでなく人工的な環境を見つめ直すときも、まず関心をもたせる必要性から、自分たちの生活に直接関わる問題からみていく必要がある。また教育とは「学校教育」・「社会教育」・「家庭教育」の3つの柱を持ち、これらが互いにうまくかみ合って連携がとれていることが重要な要件であり、地域はこの3つの柱が関連しあえる絶好の場である。このような傾向は、「生活科」の新設などの具体的な動きにもなっている。こうした意味から、身近な地域を環境教育の重要な“場”として注目してゆく。

地域における環境教育を行うときは大きなポイントが2つある。1つめは地域にある教育力（教育主体）をどこまで活かせるかであり、2つめは地域にあるさまざまな教育に活用できる資源（地域資源）をいかに効果的に取り上げるかである。この研究では、後者について注目して、環境教育の実践例を評価することとした。

1.3 環境教育と地域資源

環境教育では、環境教育法にもあるように、「自然環境と人間」、「人工環境と人間」、さらに「自然環境と人工環境の歴史的変遷」という3つの視点から地域資源を広い意味で教材化していく。そこで、実践事例をもとに、地域資源が、環境教育にどのように活用されている様子を調査・分析することにより、地域資源の環境教育への活用法について調べた。

2 環境教育実践例の調査

2.1 調査方法

環境教育実践例を調査するに当たり、まず調査表を作成した。実際に現地に赴き調査できた例と、文献より調査した例がある。なお、これらの実践例のすべてが環境教育を特に意識して実践しているものではないが、環境教育の方法のうち、いずれかに該当するものは環境教育を実践例であるとして調査に加えた。

表-1 環境教育の目標

関心	トータルな環境とそれに関わる問題に対して関心を持ち、感受性を身につけること
知識	環境とそれに関わる問題について基本的な理解を身につけ、また、人類が環境に対してきびしい責任や使命を持つことについて基本的な理解を身につけること
態度	社会的価値や環境に対する強い感受性、環境の保護と改善に積極的に参加する意欲などを身につけること
技能	環境問題を解決するための技能を身につけること
評価能力	環境の状況の測定や教育プログラムを生態学的、政治的、経済的、社会的、美的その他の教育的見地に立って評価できるようになること
参加	環境問題を解決するために主体的に行動できるような責任感と誠意を身につけること

2.2 調査結果（1）

実践形態と教育主体から、環境教育実践例は次のような5類型にわけられた（図-1）。

(a) 学校教育型：環境教育の目標達成度は高い。他に比べ歴史的視点の内容も多く扱っている。

(b-1) 日常社会教育・イベント型：環境教育の目標達成度は高い。自然環境的視点を扱ったものが多い。

(b-2) 日常社会教育・マニュアル型：マニュアルによって環境を観察するタイプ。自然環境的内容に偏りがちである。

(c-1) 郊外実践・イベント型：自然環境を扱ったものがほとんどを占める。

(c-2) 郊外実践・フィールド型：(b-2)と似ているが、常設された自然観察路的なものばかりで、自然の豊かなところがあり、自然環境を扱ったものがほとんどである。

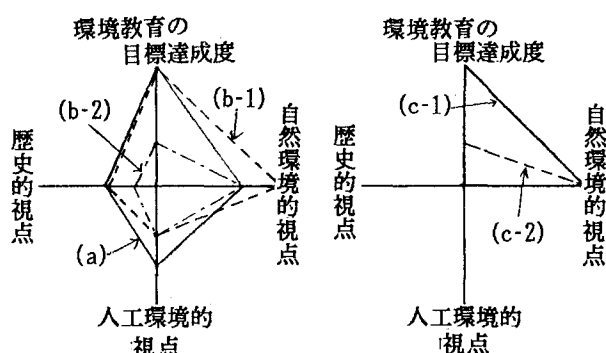


図-1 形態と主体からみた各種実践類型

2.3 調査結果（2）

環境教育の実践に使われていた地域資源として

は表-2のように10種類があげられた。これらの地域資源を環境教育の目標や、子どもの遊びの視点と密接な関係づけがなされているかどうかで評価

表-2 環境教育に使われている地域資源

視点	地 域 資 源		
自然	①河川	②地域公園	③都市緑地 ④郊外山林
人工	①農業とその関連機能	②地域公園	③郵便局
歴史	①伝統的遊び	②歴史的遺産	③伝統産業

した。次の項目ごとに10例余りを評価した。①生活に密着していて関心を持ってもらえるか、②生き物とのふれ合いを促すか（a-植物、b-動物）、③地域内のみならず他地域との連関にまで視点を広げていける条件を持っているのか、④その地域資源を通して、自分の生活の改善を行えるか、⑤地域資源の現状を市民が調査しやすいか、⑥その地域資源に対して環境保全の運動を起こしやすいか、⑦子どもが自主的にその地域資源にかかわっていけるか、⑧地域資源は広汎に自由に利用できるか、⑨地域としての独自性があるか、⑩自然環境と人工環境、歴史環境の相互の関連づけがしやすいか、という10項のそれぞれで評価し、満たしている度合を◎、○、△、×の4段階でしめし、環境教育における地域資源の利用について調べた。さらに

前述の5類型別に地域資源の利用件

数も併せ記した（

表-3）。その結果、

これらすべてを満

たすような地域資

源はないが、1つ

1つの特徴をつか

みながら、それら

の資源を有効に連

関させれば、環境

教育として有効な

地域資源利用がで

きることがうかが

えた。

表-3 地域資源の環境教育的機能

		①	②		③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	各地域資源利用例数				
			a	b									a	b1	b2	c1	c2
自然	I 河 川	◎	△	○	◎	○	◎	◎	×	△	○	◎	2	2			
	II 地域公園	◎	○	○	△	○	○	◎	◎	◎	×	◎	1				
	III 都市緑地	○	◎	○	△	×	◎	△	◎	×	○	△	3		1	1	2
	IV 郊外山林	◎	◎	◎	△	×	○	△	△	×	◎	△				1	1
人工	I 農 業	○	○	○	◎	×	◎	◎	◎	×	◎	◎	1				
	II 地域公園	◎	◎	○	△	○	○	◎	◎	◎	×	◎	2				
	III 郵便局	◎	×	×	◎	×	◎	×	◎	◎	×	×	1				
歴史	I 伝統的遊び	◎	○	○	△	◎	×	◎	◎	○	◎	-		1			
	II 歴史的遺産	×	×	×	◎	◎	◎	◎	○	△	◎	-	1				
	III 伝統産業	○	×	×	○	◎	◎	○	○	△	◎	-	1				